
貴方

華泥棒

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴方

【Nコード】

N0920B

【作者名】

華泥棒

【あらすじ】

いつもそう貴方は私の話を聞いてない。無関心。いつも上の空で・
・私のことを見てよ

第1話

目が覚めると 貴方は寝息をたてていた。

「・・・おはよう」

寝たままの貴方に言う。

貴方は起きない。

起き上がって服を着る。

顔をあらって 髪をとかして 歯を磨いて・・・

かばんを持って玄関へ向かうと後ろから声がした。

「・・・加奈？どこ行くんのだ？」

貴方の声に振り返る。

いつ目を覚ましたのか知らないけど 貴方はじっと私の顔を見る。

「今日、仕事入ったって昨日言っただでしょ？」

「・・・そうだったわけ？」

「・・・確かに言った」

「じゃあ聞いてなかった」

「じゃあ、行くから」

貴方はいつもそう

私のことはどうでもいいんでしょう。

だから私の話をいつも聞いてないのよ

上の空

だから 確認しても『そうだった？』 『いつ話したの？』 『知らない』 『聞いてない』

そればかり

もう うんざり。

私のことはどうでもよくて

私じゃなくてもよくて

ああ だったら私はなんのために貴方のそばにいるんだろう？

「・・・ただいま」

帰ると貴方はテレビを見てる。

「あーおかえり！」

「ねえ 頼んでたたまねぎ 買ってきてくれた？」

「え？頼まれたっけ？」

ホラ やっぱり。

「・・・ねえ いつもさ私の話ちゃんと聞いてくれてる？」

「んー？聞いているよ？」

「・・・絶対上の空だよね」

「何言ってるんだよ 今日機嫌悪いな？」

誰のせいだと・・・

なんのためにこの人のそばにいるんだっけ？

私の話は聞いてくれない ていうことは私の興味ない 無関心 上の空

一緒にいるとイライラする 自分勝手

なんで私この人の こんな人のそばにいるんだっけ？

甘い台詞を吐きあって 同棲して どちらも結婚を切り出さないままもう6年近く

何してるんだろう 私・・・

6年の間 言い寄ってきたいい人なんていらはずなのに

何でこの人を選んでたんだろう？

もう 意味ないか・・・

「ねえ 修一」

「んー？」

「私達 別れない？」

返事はない

「ねえ 聞ってるの？」

「聞ってるよ」

それでも私のほうは見ないで テレビを見てる。

「・・・別れてほしいの」

左手の指輪をはずす。

そこには赤い跡。

愛の跡

「なんでさ」

「なんでって 自分の胸に聞いてみて？」

指輪を貴方の手に握らせる。

「おい ちょっと待てよ！！」

やっと私のほうを向く。

「離れていく時だけはこっち向くんだね」

軽く嫌味を吐き捨てる。

財布 携帯 通帳 印鑑等

必要なものを会社のかばんに詰めていく。

「おい 待てよ・・・なんなんだよ急に」

貴方が止めても 聞かない

だって 今まで私の話をスルーし続けたんだもん 今度は私がした
っていいでしょう？

「んじゃ さよなら!」

私はそういうと家を出た。

今までずっと ほとんどを私が払ってきたこの部屋の家賃

自給800円のバイトをしてるだけの貴方に どうやってこれから
払っていく?

私の大切さを知ればいい!!

知って謝ってきても もう許さない!!

もう 忘れよう

そう思ってるのに・・・

「・・・加奈さん? 加奈さん?」

「えっ あっごめん!」

同僚の井上さんが心配そうに私を見る。

「デート中にボーツとするなんて ひどいね」

「いっごめんなさい・・・」

「他の男のこと考えてたりして？」

「え・・・アハハッそんなわけじゃない」

凶星だった

ずっとずっと 毎日考えてる 貴方のこと

ちゃんとご飯食べてる？

ちゃんと朝起きてるの？

洗濯とかできてるの？

お金とか・・・ちゃんとできてる？

「最近会社でもミス多いし・・・どうしたの？相談にのるよ？」

「う ううん なんでもないよ？」

彼氏 の前で他の男 しかも元彼氏の相談なんてできるわけじゃない
やない・・・

「まったく 心配だなあ・・・」

「え・・・えへ・・・」

心配

私ばかり心配してて 貴方はきつと私を心配していない

今も これまでも

「じゃあ また明日」

「うん 明日ね」

キスをして 別れて

あの人が見えなくなるまで待つて 大きくため息をつく。

会いたい 会いたい 会いたい

話をしたい

声が聞きたいの

顔が見たいの

抱きしめて欲しいの

それを満たしてくれる人ならいるのに

貴方にしてほしい

第2話

「加奈？」

右からの声にビクツと体がはねた。

「・・・・・・・・・・修一」

修一がいた

男友達と一緒にお酒を飲んだらしく顔が赤い。

フラフラしてる。

「あゝアンタコイツの女？悪いけど頼む。飲みすぎてるらしくて」

友達の1人が私に言いながら修一を預けてくる。

「え・・・・・・・・私・・・・・・・・」

「じゃっ！」

そう言っつて男友達はとつとと逃げてしまった。

「ちょ・・・・・・・・修一！しっかりしてよ！！」

久しぶり 貴方の顔 声 体 めくもり

「ん・・・・・・・・加奈・・・・・・・・？本当に加奈？」

「はあ？」

「加奈・・・」

修一が私に抱きつく。

「ちょ・・・痛いから！」

「夢？・・・でもいいや」

何を危ない発言してんだか！この男は！！

「・・・加奈 愛してる」

小さな声で修一が言う。

って だめ！これでぐらうときちやだめ！！自分から別れるとかい
つたくせにさ！

「もう！いい加減にしなさいよね！-！」

そっついながらも貴方を支えながらあの家へ急ぐ。

ドサッ

「ん・・・」

「ホラ 水! !」

水道水を渡すと修一は水を受け取らず私に抱きつく。

バシヤッ

「あ．．．ちよつと! 落としちゃ．．．んっ」

怒鳴ろうとして口をふさがれる。

「んん．．．．．ハアッ」

「．．．加奈」

「もー なんなの? 離し．．．」

「加奈 他の野郎といた」

「え?」

「キス してた」

「ん．．．っ」

また口をふさがれる。

「ん．．．ん．．．ッ」

「．．．許さな．．．い．．．」

そう言って修一は私の手を握る。

「や・・・離してよ・・・」

「・・・加奈・・・愛してる・・・も・・・どこにも行くなよ・・・」

「はあ？何をいまさら・・・」

「加奈・・・加奈・・・」

何度も 呪文のように私の名前を呼んで 私を抱きしめる貴方。

「修一・・・」

なんだか ドキドキしてしまっ

たまた重なるうとしてくる唇。

・・・・・・が

「・・・おえ」

「・・・へ？」

「うええええええ・・・」

「ちょ・・・やだ！待って！・・・ちよつとこらえてよ！トイレでしてよ！・・・！」

慌てて修一をトイレへと連れて行った。

ああ　なんでこうなるの？

なんなの？ねえ　私って・・・男運がないわけ？

なんだか悲しくなってきた・・・

結局　久しぶりに聞いた甘い言葉　優しいキス

それは全部酔ったいきおいでされたものだった。

次の日　二日酔いで機嫌の悪い修一に昨日のことを聞くと

「え？何それ　覚えてねえよ。お前が他の野郎とキスしてたのは覚えてるけど」

とか言う。

何それはこっちの台詞よバカ！！

「あつそ　それじゃ」

そう言って私はまた家を出ようとする。

後ろから腕をつかまれた。

「・・・何」

わざと冷たく　できるだけ鋭く　睨みつける。

それでも　身長差のせいで見下ろされるけれど。

「待てよ・・・」

頭がガンガンするらしい。弱弱しい声　ふらふらした足　頭をかかえる手

そんな状態で私に近づく。

「おま・・・え・・・また他の男のところ行くわけじゃねえだろうな」

何さそれ

「別れたんだから　私の勝手でしょ？」

そうよ　別れたのよ。

なのに私は何をしてるの？

何をされるわけでもなく　許したわけでも　よりを戻したいと思っ
ているわけでもなく

この人を家に送って　おまけに泊まって看病？して・・・

バツカみたい 何してるんだろ・・・

ため息をついてドアを開ける。

「だか・・・ら 待てって！」

「・・・なんなのさ!!」

「・・・頭痛え」

なんだそれ!!

「なんなわけ？」

「他の男ンところになんか行くな・・・って・・・」

「だからなんで？」

「俺はお前と別れることを承知した覚えはない」

・・・なんで？

なんで こういう時だけはキツパリいえるわけ？

理解できん・・・

「し・・・承知も何も！私はアンタとより戻す気なん・・・」

キスでふさがれる。

「ん・・・ッ」

「お前にそういう気がなくても 俺は別れる気な・・・い・・・」
やっぱり頭が痛むらしくため息を漏らす。

「あのね アンタといると、すごーく疲れるの！自分が何のため
に何してるのかわかんなくなるの！わかって？」

にっこりと作り笑顔を作りまくって私は修一に言う。

「お・・・い 待てよ・・・」

今度こそと修一を無視して私は家を出た。

「・・・ふざけんなバカ」

そう言って私は家を離れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0920b/>

貴方

2011年1月28日07時07分発行